

範囲を狭めているようだ。「もす」の使用頻度が低いのもそのためであろう。

## 5. 派生的用法

(73) 情熱を もやす。

(74) 希望を もやす。

比喩的に情熱や希望の炎があがるのである。これは火がつく、炎があがるといった、「もやす」の意味特徴から来ている。

(75) 彼の幼なじみに、やきもちを やく。

(76) どちら息子に 手を やく。

(77) 子どもの世話を やく。

(75)は心を熱する現象である。これは「やく」の〈加熱する〉という意味特徴から来ている。

(77)は、子どもの身のまわりに手を加えることである。

## 6. まとめ

以上の分析から、明らかになったことをまとめる。

「もやす」

対象物(固体か気体で点火しうるもの)に、外部から熱を加えて、発火させること。その結果、他の物質に変化する。

「もす」

対象物(固体で点火しうるもの)に、外部から熱を加えて発火させ、他の物質(灰、炭)に変化させること。

日常的な場面で用いられ易い語である。

「やく」

対象物(固体)に熱を加えて、質的に変化させること。もとの形に変化がない場合もある。加工する意味で、結果のヲ格をとる用法がある。

言語経歴：1958年3月東京都板橋区生まれ

0～3歳 同上

4～6歳 埼玉県蕨市

7～ 東京都練馬区在住

# 移動に関する動詞語彙

中本正智

移動をあらわす動詞は、一般的に次のような構文で用いられる。

出発点から

移動主体が 経過点を 移動する。

目標点へ・に・まで

つまり、移動をあらわす動詞は、どのような移動者(主体)が、どこからどこへ(～に・～まで)、どこを通過して、どのように移動するか、ということによって条件づけられる。

たとえば、移動主体の性質の差によって、動詞を異にする。一般に固体ならば「おちる」を用いるが、液体および液状のものは「おちる」のほかに「たれる」を用いることができる。また、出発点と目標点との位置的関係の差によって動詞を異にする。たとえば、上下の位置関係において、上を出発点とするか下を出発点とするかによって「しずむ」と「うく」が区別される。移動主体が移動そのものにどのように関わるかということも動詞を異にする一つの条件となる。たとえば、下方への移動に対して主体が意志的にコントロールできるものは「おりる」であり、意志と関係のないのは「おちる」である。

方向性

移動に関する動詞は、移動の方向性が重要な一つの特徴である。方向性があらわれる場面には次のものがある。

### 1. 地理的な方向や方位

上下(垂直的)、川上・川下(平面的)

東西南北(平面的)

### 2. 特定の事物や人を基準にした方向

左・右、前・後、内・外、近・遠、ある基準点(表面・出発点)や特定の目標点に対する方向、人前への方向、一点を中心とする円周

### 3. 表現者と移動方向との関係

「いく」「くる」のように、表現者が移動方向をどうとらえるかが問題となる。

### 4. 不定の方向

出発点と帰着点が不定の場合。

移動の仕方としては、「直進・蛇行・縦断・横断・回転」などが考えられ、それぞれ動詞語彙を異にする。

反義語

移動動詞の反義語は、動詞の意味特徴のうち、その方向性だけが逆方向になっているものである。しかし、たとえば「のぼる」と「おりる」は反義関係の語であるが、この反義関係がすべての主体もしくは対象に対となつてあてはまるわけではない。人が木に「のぼる」に対して、反義語は「おりる」であるが、日が「のぼる」に対しては「おりる」ではなく、別語「しずむ」である。このように反義関係の語の対としての用いられ方は、主体および対象によって定まっている。このような関係を示せば次のようになる。

〈反義関係の語〉	〈主体および対象〉
1. のぼる／くだる	列車の路線…
さかのぼる／くだる	水路…
2. のぼる／おりる	木・山・階段…
3. のぼる／しずむ	日（太陽）・月…
あがる／おちる	日（太陽）・月…
4. うく／しずむ	船・水中の物体…
うく／×	アドバルーン…
5. あがる／さがる	気温・熱・物価…
6. あがる／おちる	風船・ボール…
7. のる／おりる	船・馬・車・飛行機…
8. とぶ／おりる	鳥・飛行機…

この例から、反義語の関係のあり方は、なかなか複雑であることが予想される。

いま、移動動詞の中から、いくつかの動詞をとりあげて、その特徴を記述しよう。

#### 上下の方向性をもつ移動動詞

移動動詞のうち、上下の方向性を重要な意味特徴とする動詞がある。つまり、移動のとき、出発点と目標点が上下関係をなす動詞である。

#### 「あがる」と「さがる」

「あがる」の中心的な意味は、移動主体が下位から上位へ位置が変化の様態へ移動する、ということである。「あがる」は、

- (1) 風が 高く あがる。
- (2) 物価が あがる。
- (3) 手が 高く あがる。
- (4) 日が あがる。
- (5) 子供が 二階に あがる。

のように用いられる。移動主体は、風・物価・目のような無生のものでも、子供のような有生のものでもよい。しぶきやはね（跳）も「あがる」である。つまり、移動主体の質や数量は関係がない。また移動の仕方について、遅速も関係がない。

ついて、遅速も関係がない。

ところで、日が「あがる」に対して「のぼる」ともいう。二階も同様である。しかし、風・物価・手が「あがる」とは言えるが、「のぼる」とは言えない。いったい、「あがる」と「のぼる」のちがいはどこにあるのか。これを確かめるために、「～ている」を付けて、動詞を状態化してみよう。

- (6) 屋根に あがっている。
- (7) 屋根に のぼっている。

この例で、「あがっている」は移動主体が屋根の上に位置していることをあらわす。一方、「のぼっている」は移動主体が屋根の上に位置していることをあらわすだけではなく、屋根をめがけて移動している中途の過程にあることをもあらわす。これは、次の用法からもうらづけられる。たとえば、梯子の中途の移動をあらわすには、梯子を「あがる」よりも「のぼる」が普通である。ところが、対象が木ならばどうだろう。木に「のぼる」は普通であるが、木に「あがる」はほとんど用いない。

「あがる」も「のぼる」も下から上への移動であることは共通であるが、「あがる」はもっぱら上位になることに意味の中心があるが、「のぼる」は中途のいろいろな移動過程をふんで上位になることに意味の中心がある。造語も「山のぼり」はあるが「山あがり」はない。

「あがる」の用法のひろがりを見ると次のとおりである。

1. 上下関係が地理的・空間的なものから観念化されたものへとひろがって、それだけ「あがる」の意味もひろげられる。

例：家屋の内外の関係で内にあがる。陸と海の関係で陸にあがる。風呂を出ることをあがる。待遇関係で客が料理屋へあがる。他人に物をあげる。客が食事することをあがる。神仏へ供物をあげる。文化の中心への移動をあがる。犯人が検挙されることをあがる。京都では方位の北を南に対してあがる。沖繩では日の出入りによって東はアガリ（あがるい）、西はイリ（いるい）

2. 上下関係が質・等級の上下関係へひろがる。

例：手・腕・成績があがる。学校へあがる。位・川の水位があがる。

3. 上下関係が数量の大小関係へとひろがる。

例：温度・値段・生産量があがる。売上げの一日のあがり。

4. 上下関係が事物の終りや完成をあらわすようにひろがる。

例：雨があがる。仕事があがる。芝居があがる。

次に「あがる」の複合語や慣用句も実に多い。一例をあげれば、

あがりさがり、あがりおり、あがりがまち、あがり口、あがり場、あがり湯、あがり坂、最後のお茶をあらわすあがり（あがりはなく端の略）。あがったり、お手あげ。値あがり、安あがり、役人あがり、雨あがり、病あがり、仕あがり。干あがる、浮きあがる、立ちあがる、起きあがる、飛びあがる、晴れあがる、這いあがる、震えあがる、舞いあがる、出来あがる、仕あがる。

古くは、神あがり、神くだしという語があった。神あがりとは、天皇・皇族のおなくなりになることをあらわしていた。あらきのみや（殯宮）のことを「あがりのみや」ともいった。

和歌で「ほく（発句）」（五七五）に対して「あげく（挙句）」（七七）という。ここでいう「あげ」は「終わり」の位置をあらわすものであった。これから、さらに「そのあげく」「あげくの果てに」などの慣用表現を生みだしていった。

「あがる」の反義語として「さがる」がある。この反義語は、「あがる」の上下関係が逆になることによって生み出されるものである。

(8) 頭が さがる。

(9) 後に 二・三步 さがる。

(10) 帯が さがっている。

これらの例は、上位にあったものが下位になることをあらわす。

(11) せんたくものが さがっている。

この例では、上位を基点として物が「かかっている」ことを表わす。

「のぼる」と「おりる」

(12) 猿が 木に のぼる。

(13) 煙が のぼる。

(14) 日が のぼる。

(15) 若者が 山に のぼる。

「のぼる」の中心的な意味は、移動主体が下位から上位になる様態へと移動する、ということである。これだけでは「あがる」と同じ意味特徴であるが、「のぼる」の意味特徴はさらに制限されて下から上への移動過程をあらわす点も重要な特徴となっている。

(16) 梯子を のぼって 屋根に あがる。

この例は、屋根へのあがり方を段階的に表現したことになるが、「梯子をあがって」しまえば、「屋根にあがった」ことになって、段階的な過程の表現が失われて

しまう。

「さかのぼる」の中にも、やはり川の流にさからってのぼっていくという中途の過程が重要な特徴として含まれている。

「のぼる」の用法のひろがりを見ると次のとおりである。

1. 通路を上位の方向へ移動することをいう。

例：階段をのぼる。坂を急いでのぼっている。

2. 通路や目標点が明確に区別できない場合の上位への移動をいう。

例：猿が柿の木にのぼる。

3. 空間における上位への移動をいう。

例：煙がのぼる。湯気がのぼる。

4. 日や月の上位への移動をいう。

例：日がのぼる。月がのぼる。

5. 地方から中央への移動をいう。

例：都へのぼる。のぼり列車。

「あがる」が、上下関係を観念化させてその意味をひろげることによって、さまざまなひろがりのある用法を派生させているのに対して、「のぼる」は、さらに制限が加わってその移動の過程をも重視するところから、用法のひろがり「あがる」よりも狭いようである。

「のぼる」の意味特徴のうち、上下の方向の関係を逆にするによって反義語「おりる」の意味特徴になる。

(17) 屋根から おりる。

(18) 梯子を おりる。

(19) 山を おりる。

ただし、次の例はかならずしも「のぼる」との反義関係にあるわけではない。

(20) 船・車（乗物一般）から おりる。

(21) 役を おりる。

(22) 霜が おりる。

「うく」と「しずむ」

「うく（うかぶ）」は移動主体が下位から上位へ移動するということである。「うく」の意味特徴のうち、下位から上位への移動は水または空気の力にささえられて行われるということが重要である。つまり、移動主体とそれをつつむ周辺のもの（水・空気など）との力関係で移動することである。

(23) 木片が ういたり、しずんだりしている。

(24) 水に油が ういている。

(25) 海に プイが ういている。

(26) 一瞬 体が 宙に ういた。

(27) 美しい雲が 軽々と ういている。

木片が「ういたり、しずんだり」のように上下の移動もあるが、これは、つねに水の浮力にささえられていなければならない。だから上位への移動でなくても、ブイが「うく」のように、水面にささえられている状態をあらわすこともできる。空中での「うく」はアドバルーンのように空中のある位置にとどまっている場合がほとんどで、上位への移動は「うく」よりも「あがる」を用いることが多い。空中では水中のように表面が明確でないためだと思われる。水中での「うく」の反義語は「しずむ」であるが、空中での「うく」の反義語は「しずむ」ではない。

このような意味特徴をもっている「うく」は次のような派生的な用法をもっている。

(28) 歯が うく。

(29) 釘が ういてきた。

(30) ひとりだけ うきあがってしまう。

これは、水や空気にささえられているという「うく」の特徴が比喩的に用いられたもので、周囲の力にささえられて上位への力が加わり、安定を失ってしまうことである。その結果、物が基盤・基礎となるものにしっかりと固着しない状態になるわけである。「うわき、ういた話」などもこれに類しよう。然に「うかされる」、悪夢に「うかされる」は、他の力によって自己の安定を失っている状態である。良い意味でも、心が「うきうきする」ことがある。

「うく」の浮上するということは、移動主体があらわれるという結果をもたらす。そこから比喩的な用法がひろがっている。

(31) 犯人が 捜査線上に うかぶ。

(32) 良い考えが うかぶ。

(33) 母の顔が 心に うかぶ。

(34) 昏に 笑みを うかべる。

(35) 涙を うかべる。

犯人が「うかぶ」は、次第にあらわれてくることで、まだ犯人と決まったわけではない。犯人が「あがる」となると、検挙されることになる。費用を「うかす」といえば、費用の一部を最後まで見えるように残しておくことであろう。

次のように否定形で、世の中を浮上できない不幸な状態を表現する。

(36) 一生 うかばれない。

(37) このままでは 死んでも うかばれない。

(38) うかぬ顔を している。

以上のように、「うく」の意味特徴のどの面に着目す

るかによって、「浮上する・表面にあらわれる・明らかになる・余る・表情があらわれる・陽気になる」などの方向へ、比喩的用法がひろがっている。

次に、「うく」の意味特徴のうち、上下関係を逆にすることによって、反義語「しずむ」となる。

(39) 船が しずむ。

かならずしも「うく」の反義関係になくとも、下位への移動として次の用法がある。

(40) 真赤な太陽が 西の海に しずむ。

(41) ソファーに 体を 深く しずめる。

(42) 体が 雪の中に しずんでしまった。

(43) 地面が しずむ。

ある事態が普通の状態にもどることを「しずまる」「しずめる」で表現する。

(44) 嵐が しずまる。

(45) 騒ぎが しずまる。

(46) 波が しずまる。

(47) 寝 しずまる。

(48) ほこりを しずめる。

ここにおいて、「沈む」が「静まる」になったわけである。実は、「しずむ」の「しず」と「しずまる」の「しず」とは同語源である。漢字は「沈・鎮・静」をあてて意味を区別している。「しずむ」「しずか」「しずしず」「しずく(雫)」の「しず」はもともと「しづ」で、「しだれやなぎ」の「しだれる」などとも関係する語である。古くは、「しづ」は身分の低い下賤の者にも使われ、「しづの家」「しづのを(男)」「しづのめ(女)」のようにも用いた。「しずむ」の「し」は「した、しも(下)」の「し」と同源で、「しづえ」(下っ枝)などの用法が、

妹がため上枝(ほつえ)の梅を手折るとは

下枝(しづえ)の露に濡れにけるかも

(万葉集10-2330)

のようにみられる。

「おちる」

「おちる」は、移動主体が上位から下位へ移動する、ということを表わす。移動主体の質は固体であっても、液体であってもかまわない。そしてその数量にも関係がない。

(49) 二階から あやまって おちる。

(50) 花が おちる。

(51) ちりが おちている。

(52) 穴に おちる。

(53) 水が 滝になって おちている。

「おちる」は上位から下位への移動であるが、その移動の仕方は重力のまま下位へ移動する、というところに特徴がある。したがって、その移動は主体の意志では自由にコントロールできないものである。

水が滝になって「おちている」のように、下位への移動過程と、ちりが「おちている」のように下位へ移動し終えている状態をもあらわす。この点では、移動過程を重視する「のぼる」の反義語「おりる」と類似している。ただし、「おりる」が意志的にコントロールできる移動である点で大きく異なる。つまり、

「おちる」……移動主体の重力にまかせた下位への移動で、移動主体の意志で制御できない移動。

「おりる」……移動主体の意志で制御された下位への移動。

のような意味の差がある。たとえば、飛行機の「おちる」と「おりる」は、事態がまったく異なってくる。この差は、両語の間にある意味の差からきている。また、試験を「おちる」のは受験者の意志とは無関係のものであるが、試験を「おりる」ことは、受験者の意志で受験をとりやめることで、これはまったく受験者の自由意志にまかされている。

「おちる」の反義語は、「あがる」と「さがる」、「のぼる」と「おりる」のように明確な対となつてあらわれない。これは「おちる」の下方への移動をもたらす重要な要素が重力であるからであろう。重力にしたがう下降の移動は自然の移動であるが、重力とは逆の上昇の移動は自然には起こらない。そのために「おちる」だけがあつて、その対となる反義語はないのである。

#### 上下の方向性と関係のない移動動詞

「いく」と「くる」

「いく」と「くる」は、移動主体がある出発点から目標点へと移動することを表わす。

(54) 東京から 京都へ いく。

(55) 東京から 京都へ くる。

この例のように、同一主体の東京・京都間の同一移動に対して「いく」とも「くる」とも言えるわけである。

(56) 一階から 三階へ いく。

(57) 一階から 三階へ くる。

この例のように、上方への移動に対して「いく」とも「くる」ともいう。下方への移動に対しても同様である。

このようなことから、「いく」と「くる」は出発点と目標点との地理的、方向的な様態にはまったく関係がないということがわかる。つまり、出発点と目標点と

もつどのような移動に対しても「いく」とも「くる」とも言えることになる。しかれば、「いく」と「くる」の両移動を区別する重要な意味特徴はどこにあるのか。もういちど次の例をふりかえってみよう。

いく……東京から京都へいく。一階から三階へいく。

くる……東京から京都へくる。一階から三階へくる。

「いく」と「くる」を使いわけている重要な特徴は、表現者が移動方向をどうとらえるかということである。すなわち、「いく」で表現する場合には、表現者はつねに「から」格の位置、つまり出発点である「東京・一階」にいる。物理的に表現者がその位置にいなくても、表現者の意識は、つねにその位置に立っている。一方「くる」という表現をとる場合には、表現者はつねに「へ」格の位置、つまり目標点である「京都・三階」にいるか、あるいは表現者の意識がつねにそこに立っている。要するに、

いく……表現者の領域から遠ざかる移動。表現者はつねに移動の出発点側に立っているか、あるいはそこにいる意識をもっている。

くる……表現者の領域へ近づく移動。表現者はつねに移動の目標点側に立っているか、あるいはそこにいる意識をもっている。

ということになる。

このように「いく」と「くる」とは、表現者と移動方向との関係が重要であつて、「～ていく」「～てくる」が動詞に付くと、その動詞に表現者との関係で移動方向をもたせる役割をする。たとえば、「歩く」は本来、方向性をもっていないが、「歩いていく」となると、表現者のいる場所から、そこを出発点として歩行によって遠ざかる移動を表わし、「歩いてくる」は、表現者のいる場所へ、そこを目標点として歩行によって近づく移動を表わすようになる。

したがって、移動主体と表現者との関係によってその用法に次のような差を生じる。

1. 移動主体と表現者とが別の個人であるときには何の制約もなく次のように用いられる。

(58) 彼が いま 歩いていく。(進行態)

(59) 彼が いま 歩いていった。(完了態)

(60) 彼が いま 歩いてくる。(進行態)

(61) 彼が いま 歩いてきた。(完了態)

この例では、移動主体の「彼」と表現者とは別の個人である。

2. 移動主体と表現者とが同一個人であるときには、その用法に制約が生じる。

(62) 私は いま 歩いていく(とこだ)。

(63) ×私は いま 歩いていった。

(64) ×私は いま 歩いてくる。

(65) 私は いま 歩いてきた。

「私」が主語になるということは移動主体と表現者とは同一個人であるということである。移動主体と表現者とは現実的に分離不可能であり、その移動が行なわれている間、時間的にも空間的にも同一点に同居していなければならない。だから、用例の「いま 歩いていった」は移動主体が表現者のところを過ぎてしまったことであるから、移動主体として「私」をとりえない。「いま歩いてくる」は移動主体が表現者のところへ向ってくるのであるから、やはり移動主体として「私」をとりえない。「いま 歩いていく(ところだ)」という表現では、移動の出発点において「私」が移動主体としても表現者としても同居しうる。「いま 歩いてきた」という表現では、移動の目標点において「私」が移動主体としても表現者としても同居しうる、ということになる。

ただし、このような制約も、移動の行なわれる時と、表現の行なわれる時とをずらせば、次のように表現が可能となる。

(66) 私は 明日 歩いていく。

(67) 私は 昨日 歩いていった。

(68) 私は 明日 歩いてくる。

(69) 私は 昨日 歩いてきた。

移動の時を「明日」とか「昨日」のように、表現時の「いま」とちがえることによって、移動主体と表現者を客観的な「私」で一致させることができるのである。

次に、「～ていく」「～てくる」は先行する動詞によっていろいろな意味を表わす。

1. 「歩く」のように移動の動作をあらわす動詞につくと、移動の手段を表わす。「走る・這う・駆ける・泳ぐ」など。

2. 「坐る」のようにある状態に入る動詞につくと、移動時の状態を表わす。「眠る・乗る・腰かける」など。

3. 「買う」のように意志的な他動詞につくと、その動作を済ませてから、「いく」「くる」の移動に入ることを表わす。「売る・読む・書く・捨てる・拾う」など。

4. 「抱く」のように、「抱く」の動作と「いく」「くる」とが平行して行なわれることを表わす。「送る・持つ・運ぶ・乗せる」など。

5. 「生きる」のように時間的な継続を表わす。「暮らす・堪える・続ける・勤める」など。

6. 「あらわれる」のようにある事物が生起することを表わす。思い・考え・気持などが心理的に「浮かぶ、出る・起こる」など。

7. 夜が「明ける」のようにある状態が変化していく過程を表わす。「帯びる・薬が効く・冴える・衰える・老いる・疲れる・増す・弱る」など。

表現者の眼前に顕現する意味の「現われる・起こる・あふれる・湧きあがる」などの動詞には「～てくる」が付きやすい。また表現者の眼前から消失される意味の「なくなる・死ぬ・隠れる・減ぶ・沈む」などの動詞には「～ていく」が付きやすい。

「行く」「来る」には「行ってくる」だけが可能であり、「行っていく・来てくる・来ていく」は言えない。

「いく」と「くる」の基礎的な動詞であっても地域的な変容が観察される。

たとえば八丈島の「いく」と「くる」は東京の場合とは異なり、移動方向と表現者との関係だけではなく、移動方向には、さらに地理的な上下関係が加わっている。八丈島は、内側に東山(三原山)と西山(八丈富士)があつて、島の内側は高く、海岸寄りに低くなっている。島全体が斜面の多い島である。この斜面の上下の地形が「いく」「くる」の方向性と関係するようになったと考えられる。

つまり、「いく」の場面では、地形的に上方への移動はイクといい、下方(海岸寄り)への移動はデルという。「くる」の場面では、地形的に上方への移動はクルといい、下方(海岸寄り)への移動はデクルという。「いってくる」という場面でも、上方へはイッテデルといい、下方へはデテクルという。このような差も最近の若者は失いつつある。

言語経歴：0歳～23歳 沖繩県

23歳～現在 東京都・埼玉県

## 参考文献一覧

ここに掲げる参考文献は、本書の意味論関係の論文において各自が参照・引用したものを一括して、文献

の著者の五十音順に並べたものである。著書・論文の内容により、殆どの者が参照しているものもあれば、

ただ一人だけが参照しているものもある。このように  
まとめたのはあくまでも便宜的手段であって、御理解・  
御寛恕願いたい。

- 浅野百合子1968「類義語考(1)」『たより』32 日本語  
教師連盟  
" 1970「類義語考(5)」『日本語教育研究』2  
日本語教師連盟  
荒川惣兵衛1967「外来語辞典」角川書店  
池上 嘉彦1977「「する」と「なる」の言語学3」『言  
語』Vol.6 No.12 大修館  
榎垣 実1966「外来語辞典」東京堂出版  
奥津敬一郎1967「『カラ』『マデ』『マデニ』—順序助詞  
を中心として—」『日本語教育』9  
" 1974「生成日本文法論」大修館書店  
金田一京助他1972「新明解国語辞典」三省堂  
" 1974「新明解国語辞典 第二版」三省堂  
金田一春彦  
池田弥三郎1978「学研国語大辞典」学習研究社  
国広 哲弥1967「構造的意味論」三省堂  
" 1968「意味論・語彙論」『文学・語学』48  
三省堂  
" 1970「意味の諸相」三省堂  
国立国語研究所1964「分類語彙表」秀英出版  
" 1972「動詞の意味・用法の記述的研究」  
秀英出版  
柴田 武1976「ことばの意味 辞書に書いてないこ  
と」平凡社  
新村 出1976「広辞苑 第二版補訂版」岩波書店  
時枝誠記  
吉田誠一1973「角川国語中辞典」角川書店

- 徳川宗賢  
宮島達夫1972「類義語辞典」東京堂出版  
中本ゼミ1978「日本語研究 第1号」東京都立大学  
国語学研究室  
中本 正智1972「動詞語彙の意味記述」『人文学報』96  
" 1978「語彙の意味論的研究序説」『日本語  
研究』1 所収  
長嶋 善郎1973「サガル・オリル・オチル・クダル」  
「ことばの意味」(p.24—31) 所収  
" 1975「ツル・ツルス・サゲル・カケル」  
「ことばの意味」(p.188—195) 所収  
西尾 実他1971「岩波国語辞典」岩波書店  
" 1973「岩波国語辞典 第二版」岩波書店  
日本大辞典刊行会1972—76「日本国語大辞典」小学館  
服部 四郎1960「言語学の方法」岩波書店  
" 1963「英語基礎語彙の研究」三省堂  
文化 序1971「外国人のための基本語用例辞典第二  
版」大蔵省印刷局  
森田 良行1977「基礎日本語」角川書店  
山田 進1973「アガル・ノボル」『ことばの意味』  
(p.14—23) 所収  
C.J.Fillmore 1968 "The Case for Case" Universals  
in Linguistics Theory. Holt, Rinehart  
and Winston.  
NHK 総合放送文化研究所放送用語研究部1968  
「放送用語ノート(6)(7)「埋める」と「う  
ずめる」」『文研月報』12 日本放送出  
版協会